論文審査の結果の要旨　　氏名　鄧　捷

旧中華帝国体制を 20 世紀初頭まで持続させた中国は、欧米・日本と比べて国民国家建設に遅れを取り、産業社会化と国語・文学の誕生も第一次世界大戦まで待たねばならなかった。こうして中国の文学者は国語と文学を創出することにより、“想像の共同体”である国民国家を創出しようと奮闘し続けてきた。1910 年代末に誕生した近代詩もまた自己表出と共に国家建設を自らの主要な任務と認識している。鄧捷氏の博士論文は、近代詩成熟期である 1920 年代から 40 年代の中国詩人における個の自意識と国家意識との葛藤を考察するものである。なお副題中の「風」とは国家形成の現実を、「琴」とはその現実に参与する詩および詩人を隠喩する詩語である。

博論第一章「新詩詩論における『人格』言説」は、近代西洋思潮に由来する「人格」概念が 20 世紀初頭に日本経由で中国に伝えられたのち、1920 年代には「個」と「国家」の理念を同時に追求する詩人たちによる新詩論のキーワードとなっていく軌跡を描く。

第二章「『愛国』と『文芸』のはざまで」は、聞一多（ウェン・イートゥオ、ぶんいった、1899 ～ 1946)、梁実秋（リアン・シーチウ、りょうじつしゅう、1902 ～ 87）ら、清華大学「新格律派」が主張した「文学の現実性」論を、「愛国」と「文芸」の共存を追求する運動であったと考察する。

第三章「一九二〇年代中国におけるタゴールの受容と聞一多の格律詩」は、インド詩人タゴールの影響下で自己表現重視の文学観に傾く鄭振鐸（チョン･チェントウ､ていしんたく、1898 ～ 1958)、「精神の自由、不滅の人格」を讃える徐志摩（シュイ・チーモー、じょしま、1897 ～ 1931）らを論じ、1923 年タゴール訪中の際の論争が「個」と「国家」の理念的衝突でもあった点を論じる。さらにその後、聞らの格律詩運動に徐が参加して「新月詩派」が生まれる過程を、「個」と「国家」との関係の成熟とも指摘している。

第四章「日本留学生における「国民文学」論――穆木天」は、東京帝大仏文科に留学した穆木天（ムー・ムーティエン、ぼくぼくてん、1900 ～ 71）が「恋愛」と「国民生命」という二つのテーマを追求し、象徴詩という当時最前衛の様式により個の情念と国民国家の理念とを同時に表出せんと試みた軌跡を描く。

第五章「二つの国家に翻弄された詩人―江文也」は、植民地台湾出身の「日本人」音楽家・詩人江文也（チアン・ウェンイエ、こうぶんや、1910 ～ 83）が、日本占領下の北京で中国伝統文化に陶酔するいっぽう、人力車夫ら貧民に同情しつつ、中国アイデンティティを形成していく過程を、江の二冊の詩集『北京銘』『大同石佛頌』の分析を通じて論じている。

本論文の主な成果は次の通りである。

（1）1920 年代中国の若き詩人たちが、自己表出とナショナリズムという二つの課題を詩論として統合していく過程を、詩人たちのアメリカ・日本留学体験、インド詩人の訪中など広い比較文学的視点から分析し解明した。

（2）さらに日本統治期台湾の詩人たちにも焦点を当て、台湾人作曲家・詩人の江文也が、日中戦争期の日本占領下の北京で中国アイデンティティを形成していく過程を、1921 年に訪中して『支那游記』を書いた芥川龍之介の中国体験と比較しつつ分析し解明した。

本論文は第 1 ～ 4 章と第 5 章とのあいだに十分な統合性を構築するには至っていない。また伊藤虎丸著『魯迅と日本人　アジアの近代と「個」の思想』（1983）を批判的に乗り越えようと試みているが、「家族や国家等の何らかの“全体”に対して“部分”の関係に立つものではない」「“個”としての人間の自覚」がヨーロッパ“近代”精神であるとする伊藤氏近代論の歴史性に対する考察を欠いている。

しかしこれまでの 1920 ～ 40 年代中国詩研究が「愛国詩」論と個性論との二項対立となりがちであったのに対し、聞一多、徐志摩、江文也ら著名な詩人たちの「風と琴」とをめぐる真摯にして苦闘に満ちた詩論の展開を多面的に解明した点を中心に顕著な成果をあげており､本審査委員会はその内容が博士(文学)論文として十分な水準に達しているとの結論を得た。